
Just my type

長尾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Just my type

【Nコード】

N2551BA

【作者名】

長尾

【あらすじ】

親の都合で通っていた愛染女子学園の高等部に通えなくなった愛莉。従兄弟の明良とその友達にして愛莉の彼氏でもあるタクミ君と同じ高校に入学することになる。

明良とタクミ君の間で揺れ動く気持ちを抑えたいのに抑えられない愛莉の高校生活です。

1 入学式当日（前書き）

最低でも週に一回は更新したいと思います。完結まで頑張ります。

1 入学式当日

「入学式の準備があるから一緒には行けないけど、明良あきひが迎えに来るから」

タクミ君はそう言った。私は頷きながらも眉間に皺しわが寄るのを止められない。

「待ってるんだよ。一人で行くな」

反抗的な態度はバレバレだったようでタクミ君は私の肩に両手を乗せると確認するように覗き込んでくる。

「分かった」

私はぶいっつと横を向いた。真正面にいるタクミ君が私の肩を掴んでいるから動くのは首だけだった。タクミ君は苦笑して私の頬にキスをした。

「やっ」

頬に手を当てて睨むとタクミ君は上機嫌で笑った。私のことをぎゅっと抱きしめて耳元にまでキスをする。

「これから同じ学校に通えて嬉しい」

タクミ君は今日は朝からテンションが高い。笑顔の大売出しみたいに笑い続けている。せっかくの整った顔が台無しだ。普通にしていたら韓流スターにも負けない美貌なのにもつたいない。

「じゃあ、行ってくる」

手を振るタクミ君に手を振って見送った。深い深いため息が漏れる。私の気分は下降中。タクミ君と一緒にいけないからじゃない。高校の入学式に憧れだったセーラー服を着れなかったことが辛い。私は小学校から通っていた愛染女子学園の高等部に進学したかった。タクミ君と同じ学校に行くつもりなんてなかったんだもの。

タクミ君は私の従兄弟、明良の友達。両親が仕事で忙しいからよく駅二つ離れた明良の家に預けられていて、そこでタクミ君に会

った。夏休みとかには一月も明良の家にいたからタクミ君ともよく遊んだ。中学生になって付き合っただけだと告白されて、付き合ってる。ケンカはしない。タクミ君はなんでも言うことを聞いてくれるから。

でもこんな関係、間違っている気がする。違和感が常にある。それをタクミ君に一生懸命伝えようとするのに、タクミ君はちっとも真面目に取り合ってくれない。「また愛莉あいりが迷宮に入っちゃった」って笑う。笑って、ぎゅって抱き締めて私の胸に沸きあがる疑問をなかつたことにしようとする。私は真剣に悩んでいるのに。自分の気持ちがあやふやなのが辛いのに。

車庫から自転車を出しているとブレーキの音がして目の前に明良のぴかぴかの自転車が止まる。

「愛莉、おはよ」

「おはよ」

小さく答える。苦笑した明良は私を子ども扱いして頭を撫でた。同じ年なのに明良は兄の役に徹しようとする。私が泣いてばかりだったせいだ。明良が妙に大人びてしまったのは多分私のせい。

小さい頃はいつも明良の家に預けられていて幼稚園にも迎えに来てくれるのは明良ママで。私はそのことがとても悲しかった。自分だけいつもママが来てくれなかったことが、本当に悲しかった。見捨てられた子供なんだって眼前に突きつけられたような気分がよく泣いた。そして明良ママと明良を困らせた。夏休みの間、ママは電話は寄越すものの会いには来なかった。たった二つ早く駅を降りて少しでも私の顔を見てから帰宅するという手間をママはいつも惜しんだ。寝る前になると泣く私のために明良ママと明良は根気良く付き合ってくれた。

ママが生活を支えるために必死だったことに私は気付かなかった。そうして愛染女子学園の目が飛び出るような学費を払ってもらいながら当然な顔をして私を愛していないパパとママを呪っていた。

だから罰が当たったんだと思う。パパは過労で倒れて会社を辞めた。私は中学まではなんとか続けられたけれど、高校は都立に通うしかなくなった。

パパとママが共働きで一生懸命家計を支えていた時、私は家の手伝いすらしないで家族の時間がないと捻くれていた。とんでもない親不孝者。それにパパの体調よりも愛染女子学園に通えないほうが悲しいなんて。人として失格だと思う。小さい頃からパパとママは遠い存在で、だからちっとも好きじゃない。お金はかけてもらったけれど、そのことには感謝するけれど正直なところ私にとって家族は明良ママと明良なんだ。

明良にはずっと家族でいて欲しい。だから私はタクミ君を利用したのかもしれない。明良を男としてみているわけないって誤魔化すためにタクミ君の手を取ってしまったように思う。

タクミ君のことは好きだけど、それは恋人としてなのか疑問に思う。話し合おうとしてもいつもタクミ君にかわされる。少しずつ距離を置こうと思っていた矢先に同じ高校に通うことになるなんてとてもついてない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2551ba/>

Just my type

2012年1月6日15時46分発行